

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00353

研究課題名（和文）明清の散文における亡妻哀悼文学の展開

研究課題名（英文）Laments in Prose for Lost Wives in The Ming and Qing Eras

研究代表者

野村 鮎子（Nomura, Ayuko）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：60288660

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：中国の文人が亡妻を哀悼するために自ら書いた墓誌銘や祭文は、中唐や晩唐の文人の文集に散見されるが、この時点で一般化していたとはいえない。文人が自らの家の中の女性を描写することは、儒教的な礼の規範を逸脱した行為だったからである。しかし、明になると、妻に先立たれた文人は必ずといっていいほど墓誌銘や祭文を執筆するようになる。さらに明清には亡妻を哀悼するために、本来は男性を顕彰するための伝記文だった「行状」という長篇の散文も用いられるようになる。哀悼の対象も亡妻から亡妾へと拡大した。こうした亡妻哀悼文学の発展の背景として、明清の文人社会の間で夫婦の情に共感する心性が醸成されていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの亡妻哀悼文学の研究はおおむね潘岳の「悼亡詩」以来、詩を中心に進展してきたが、その対象時期は宋代までにとどまっていた。亡妻（妾）の哀悼文学としては明の張岱『陶庵夢憶』や清の冒襄『影梅庵憶語』がよく知られているが、本研究は、明清の亡妻墓誌銘、亡妻行状、祭文などの散文形式の哀悼文学を通史的に考えたもので、これまででない視点である。また、家の中の女性のことを語るべきではないという儒教の伝統的な「礼」の規範と文学による「情」の発露のせめぎ合いの間でどのように女性を語る文学が発展したが、明清における亡妻哀悼散文の流行の背景と特徴を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In the middle to late Tang era, some scholars contained epitaphs and funeral orations that mourned the death of their wives in their collections of works. Yet writing funeral orations was never a common practice because writing about women in their households deviated from the Confucian norm. However, in the Ming era, it almost became a rule for scholars to write epitaphs and funeral orations for their deceased wives. In addition, they started using the form of a brief biography in prose, which previously had been used solely to honor men and to commemorate their achievements. The objects of mourning have also expanded from their married wives to concubines. This research demonstrates that these developments occurred against the backdrop of a growing mentality that showed more respect and understanding for marital bonds and affections among the literati community in the Ming and Qing eras.

研究分野：中国文学

キーワード：哀悼文学 亡妻 墓誌銘 行状 明清文学 悼亡 亡妾

1. 研究開始当初の背景

亡妻哀悼文学の研究はこれまで「悼亡詩」を中心に展開してきており、海外でも日本でも悼亡詩に関する研究論文は多い。それに比して、散文に着目した研究は、拙論「唐代亡妻墓誌銘考」(1998)「歸有光「先妣事略」の系譜 母を語る古文體の生成と發展」(2003)「明代における非古の文体と女性」(2009)があるにすぎなかった。

また、夫婦の情に視点を置いた文学研究では佐藤保に「宋詩における女性像および女性観 愛する女性へのうた」が、中原健二に「詩人と妻 中唐士大夫意識の一断面」(1993)と「夫と妻のあいだ 宋代文人の場合」(1994)があるが、それらの研究対象は宋までであり、明清についての考察はないという状況であった。一方、海外では近年、明清の女性墓誌銘から女性像を探ろうとする研究が出始めている。たとえば、孫小力「錢謙益女性墓誌銘的特點及其文化意義」(2007) 柯麗德(Katherine Carlitz)「情婦・長舌婦・妖婦與良婦：明中期墓誌銘及小中爭競的女性形象」(2011) 金蕙涵「情與德：論明代江南地區的側室合葬墓」(2012) 陳超『明代女性碑伝文与品官命婦研究：以“四庫”明人文集為中心的考察』(2013) Katherine Carlitz, “Mourning, Personality, Display: Ming Literati Commemorate Their Mothers, Sisters, and Daughters” (2013) などである。ただし、明清の亡妻墓誌銘/行状という文体の特殊性に着目したものはなかった。

2. 研究の目的

本研究は、明清の士大夫が自ら筆を執って亡妻(亡妾)を哀悼した散文 亡妻行状・亡妻墓誌銘・祭亡妻文を中心に、明清の哀悼文学の特徴を考察するものである。

妻の死を悼む文学は、明清でも伝統にのっとりて悼亡詩の形式をとることが多い。しかし、明清の哀悼文学が前代と大きく異なるのは、亡妻を追悼するのに、散文の形式を用い、その文体と内容を発展させたことにある。すなわち文体では、亡妻(亡妾)のための墓誌銘だけでなく行状という本来、妻を哀悼するのに用いられていなかった散文体を用いるようになったこと、内容面では亡妻の人となりや過ぎ去った日々の暮らしを詳述するようになったことが挙げられる。

儒教的規範からいえば、士大夫が自らの家人を語ることは「礼」を逸脱した行為であり、亡妻行状・亡妻墓誌銘は非古の文体に属する。しかし、彼らが明から清にかけて、哀悼という形にせよ散文で亡妻の思い出や日常生活のディテールを描写するようになったことは大きな変化である。このような変化どのように起こったのか、またそれが文学として成立したのはなぜかを解明する。

3. 研究の方法

(1) 明清の亡妻墓誌銘・亡妻行状・祭亡妻文についての調査

明末から始まった亡妻行状が清に至って亡妻墓誌銘を凌駕する数になったという仮説に基づき、この仮説を実証するべく、まず亡妻墓誌銘・亡妻行状・祭亡妻文の全体量を把握する。まずは科研費の補助金で購入し、電子データを活用した。ただし、この類の散文は単純な検索で得られるものではない。なぜならば、散文の標題に「亡妻」「亡室」とあれば、士大夫が亡妻のために書いたものであることは明らかだが、「○○夫人」または「○氏」とのみ題されている場合も多いからである。また、明清の文集には影印本や電子データがないもののがかなりあり、そのため、国内外の所蔵機関に直接赴き調査した。

(2) 女性墓誌銘/行状の文体に対する金石学者や儒学者の見解の整理

女性の行状について否定的立場を採る者はいた。黄宗羲、閻潜丘、顧炎武といった清の金石学儒学者の見解を調べつつ、清の学者が文体としての亡妻行状をどのようにとらえていたかを整理する。

(3) 亡妻墓誌銘・亡妻行状の展開についての考察

(1)と(2)の作業を進めながら、作品を精読する。明の亡妻墓誌銘で注目するのは、「妻亡して予 然る後に吾が妻を知るなり」と述べた李夢陽「封宜人亡妻左氏墓誌銘」である。また、亡妻行状では、李攀龍が糟糠の妻徐氏のために書いた「亡妻徐恭人行状」を精読する。特に清の乾隆・嘉慶年間に隆盛した古礼を重んじる考証学者であり、本来、女性行状を否定する側に属する人物が、実際には亡妻行状を執筆していることに着目して考察する。

(4) 「情」と「礼」の二項対立についての再考

中国の文化史研究では、明の学術は「情」を、清は「礼」を重んじる傾向にあることがしばしば指摘される。しかし、実際には清にも亡妻墓誌銘は存在し、亡妻行状は明代にも増して多く創作され、その量は亡妻墓誌銘を凌駕するほどである。これは清の学術を乾嘉の礼学一辺倒で理解しようとする、説明がつかない現象である。清人が亡妻を哀悼するのに行状という文体を選択したのはなぜか、清人は「情」と「礼」について どのように折り合いをつけたのか、夫婦の情愛に共感する士大夫の心性について考える。

4. 研究成果

明清の士大夫が自ら筆を執って亡妻(亡妾)を哀悼した散文、すなわち亡妻行状・亡妻墓誌銘・祭亡妻文を中心に、明清の哀悼文学の特徴を考察した。まず、明清の文集を所蔵する国内外の機関で亡妻哀悼散文の悉皆調査を行い、その調査結果をもとに、明清の亡妻哀悼散文に関する特徴を明らかにした。以下にその概略をあげる。

(1) 亡妻哀悼散文の量的拡大

夫が亡妻のために墓誌銘の筆を執るというのは、すでに南北朝時代に先例があるものの、それを文学の域に高めたのは、中唐の古文家たちである。墓誌銘や祭文は、故人を顕彰し、家門の誉となるように、伝手を頼って高位高官または名文家に委嘱するのが常であるが、自らこれを執筆する士大夫が現れたのである。

伝世の文献に収録されているものに限って言えば、唐代の亡妻墓誌銘では柳宗元「亡妻弘農楊氏誌」、亡妾墓誌銘では元微之「葬安氏誌」、沈亞之「盧金蘭墓誌銘」しかないが、これ以外に考古資料の墓誌にも夫が執筆した亡妻墓誌銘や亡妾墓誌銘が多数確認されている。陳尚君「唐代的亡妻与亡妾墓誌」は、土中より発掘されたものを含めると亡妻墓誌銘は八十七篇、さらに亡妾墓誌銘も約二十篇あるとする。その大部分は中唐、晩唐の作品である。

宋代になると、歐陽修の「胥氏夫人墓誌銘」「楊氏夫人墓誌銘」、曾鞏の「亡妻宜興県君文柔晁氏墓誌銘」「祭亡妻晁氏文」、蘇洵の「祭亡妻文」、蘇軾の「亡妻王氏墓誌銘」「祭亡妻同安郡君文」など、古文作家を中心に多くの作品が登場する。宋の文学者にとって妻の死は文学の重要なテーマであったようで、このほか蘇舜欽・李覯・黄庭堅・周必大・呂祖謙・陸游・劉克莊といった争々たる文学者の集中に、亡妻を哀悼する散文が確認される。さらに、司馬光「叙清河郡君」や胡寅「悼亡別記」、陳著「内子趙友直字説」のように、記叙説の文体で亡妻を哀悼したもの、蘇軾「阿弥陀仏贊」や李新「亡室王夫人真贊」のように画贊の形をとるもの、蘇軾の「書金光明経後」、趙汝騰「孫安人誌銘跋」のように跋文の形をとるものも存在する。筆者の調査によれば、伝世の文献に現存する宋から元にかけての亡妻墓誌銘は四十七篇、祭亡妻文は三十四篇ある。

ところが、明代に至ると、妻に先立たれた文学者は、古文辞派であれ唐宋派であれ公安派であれ、文学思想の違いを超えて、ほとんどの士大夫が亡妻墓誌銘や祭亡妻文を書くようになる。管見の及ぶところ、伝世の文献中に現存する明代の亡妻墓誌銘は一百三十七篇、祭亡妻文は一百五十一篇である。近年発掘された亡妻墓誌銘はここに含まれていない。そして清代では、亡妻墓誌銘一百三十九篇、祭亡妻文一百三十一篇を確認している。明や清は宋元に比して伝世の文集が多いため、単純な比較はできないものの、このことから、士大夫が亡妻のために墓誌銘や祭文を執筆することは、もはや特段珍しいことではなくなっていたといえる。

(2) 亡妻哀悼散文の文体の多様化

しかし、墓誌銘は石に刻され墓中に埋められることが前提で執筆される文体である。出土した墓誌銘の現物や拓本を見るに、墓文を刻む石の大きさは身分や財力によってある程度決まっていたことがわかる。体例上の制約もある。文の体裁としては前段の墓誌と呼ばれる散文と文末の銘と呼ばれる韻文とに分かれており、墓誌の部分には被葬者の姓名、家世、生日、卒日、寿年、子孫、葬地、爵位といった基本情報と生前の政績が記され、銘は被葬者の生涯と遺された者の悼念が四字句などの韻文で締めくくられる。墓誌に上記のような被葬者の基本情報を書くと、そのほかの生前のエピソードを紹介したり、悼念を示したりするための篇幅の余裕はほとんどなくなる。墓誌銘はいささか窮屈な文体であり、この文体は伝記文学としても哀悼文学のスタイルとしても決して自由度の高い文体とはいえなかった。

そこで次に新形式として発展してきたのが行状という散文の文体である。行状は、行略、行実、事畧、事状、述ともいい、主に故人の親族や門生によって作成されてきた。その本来の機能は大きく分けて三つある。一つ目は諡号を検討する際の参考資料として太常寺に提出するためのもの、二つ目は将来の史書編纂に備えて故人の生前の業績を史館に報告するためのもの、三つ目が墓誌銘や伝記の執筆を著名人に依頼する際の資料である。

一つ目の諡号は、職事官三品以上の官僚に与えられるもので、女性は対象外である。二つ目の将来の史書編纂に備えるというのは、女性では烈女節婦として正史の列女伝に編録される場合が想定されるが、通常、よほどの事蹟がない限りその機会はない。そのため、女性行状の目的はもっぱら墓誌銘の執筆を著名人に依頼する際の提供資料ということにあった。行状には墓誌銘に必要な基本情報は不可欠だが、とりたてて字数の制限もなく、内容の自由度が高い。

宋ぐらいまでは、女性の行状の役割はあくまで墓誌銘作成の際の資料という位置づけであり、墓誌銘が完成すれば用済みになり、士大夫の文集に亡母や亡妻の行状が載録されることは稀であった。たとえば梅堯臣の文集には亡妻への哀悼詩は収録されているが、歐陽脩に提供されたとされる謝氏行状なるものは見当たらないし、蘇軾の文集に母程氏の行状は収録されていない。

宋元では、女性の行状や亡妻の行状は、文学としてまだ認知されていなかったものと思われる。宋代では伝世の文献の中に士大夫が自らの亡妻のために執筆した行状は二篇、元代では一篇あるのみである。南宋の時点でも俞文豹や王柏のように、生前の事蹟を史官に報告することを第一義とする行状という文体を、公的な事蹟がない女性に用いることに反対する意見も存在した。

上述したように伝世の明人の文集に残る亡妻墓誌銘は一百三十七篇、亡妻行状は六十二篇で

ある。圧倒的に墓誌銘の方が多いが、明の中期から亡妻行状が徐々に増える傾向にある。そして清代では、これが逆転し、行状や伝の方が墓誌銘より多くなる。筆者の今日までの調査では、亡妻墓誌銘が一百三十九篇なのに対して亡妻行状は一百八十二篇を確認している。

明の中期以降、亡妻行状が増えるターニングポイントの一つとして挙げられるのが、古文辞後七子の領袖、李攀龍が糟糠の妻徐氏のために書いた「亡妻徐恭人状」である。この作品は、ちょうど柳宗元「亡妻弘農楊氏誌」が亡妻墓誌銘の歴史の中で一つのエポックとなったように、亡妻行状という新しい散文スタイルの途を拓いたといえる。

亡妻行状は、以後、明末に増加の一途をたどり、清初には士大夫の間に広く流行したと考えられるが、かつて南宋の俞文豹や王柏が反対したように、清初にあってもなお汪鈍翁のように、女性行状という文体を認めようとしぬ者も存在した。彼によれば、女性の行状は、夫婦合葬の墓誌銘の蓋石に夫と並べて妻の氏を記するのと同じくらい古義に反することであった。

しかし、行状という新しい文体を獲得した明清の哀悼散文は、長篇化することで、よりいっそう抒情的な筆致になる。

(3) 描写の細やかさと「情」への肯定

自ら亡妻について語る哀悼散文では、亡妻の在りし日の日常が具体的に描かれること、しかもしばしば内容が家の中の些事に及ぶことに特徴がある。士大夫が亡妻のために墓誌銘等を執筆することは、感傷を詠じる悼亡詩とは異なり、自らの家の中の些事を公にすることにつながる。本来「内言は梱を出でず」(『礼記』曲礼上)の儒教倫理、「礼」の規範に抵触する営みといえる。明清の哀悼散文は前代と比べて、亡妻の思い出や日常生活の描写がいっそう細やかなものになった。それは亡妻行状という文体の流行によってもたらされた特徴であると同時に、亡妻への悼念が士大夫の間ですでに共感可能なものとなっていたことを示している。

士大夫は生活のディテールを描く亡妻行状という文体を獲得したことによって、平平凡凡ではあるが、夫にとって、子にとって、その家にとって大切な女性との生活や感情をありのまま描くことが可能になった。そして、それは中国の散文史を多様なものにしたといえる。

亡妻哀悼文執筆の士大夫の心性を文学史の面から論じるならば、まずはこの時期の思潮として「情」への全面的な肯定を指摘しておかねばならない。明中期以降の経済的な豊かさや陽明学左派に象徴される思想面での解放は、伝統的な文学観をも揺るがした。湯顯祖の戯曲『牡丹亭還魂記』のように男女の情を肯定的に描く文学が士大夫層にも広く受け入れられたのである。男女の情、夫婦の情、親子の情が文学の主要なテーマになったことで、女性に対する「情」を叙すことへの障壁は低くなった。その流れは清になっても途切れることなく続いた。

一般には清の乾隆・嘉慶年間の礼学に代表される道徳上の厳格主義によって、叙情は駆逐されたかのように思われがちだが、亡妻哀悼文はむしろ前朝にも増して普遍化したことが明らかにされた。

(4) 亡妻哀悼文の対象の拡大

明清時代には、亡妻哀悼文の対象が、妻のみならず、妾婢とよばれる非正規の女性家族や聘妻つまり婚約したが未だ嫁いできていない女性にも拡大した。

妾婢は没後も正妻を差し置いて夫と合葬されることはなく、死後の祀りも息子による一代限りである。ただし、男子を産んだ妾婢は厚遇され、死後に墓誌銘や祭文が用意されることが多い。特に元までの墓誌銘や祭文のある妾はほとんどが男子を産んだ女性に限られている。しかし、明清になると男子を産んでいるかどうかにかかわらず、士大夫は亡き妾婢のために自ら墓誌銘や祭文を執筆し、純粋にその死を悼むようになる。息子のためという口実を必要としなくなるのである。

管見の及ぶところ、伝世の文献中に見られる唐の亡妻墓誌銘は、元微之「葬安氏誌」と沈亞之「盧金蘭墓誌銘」の二編である。宋では蘇軾「朝雲墓誌銘」と周必大「芸香誌」の二編、元では戴良「亡妾李氏墓誌銘」と陸文圭「妾陳氏墓誌銘」の二編である。ところが明になると十八篇、清では三十六篇確認される。また祭亡妾文は、元以前では一篇のみだが、明では七篇、清では十四篇になる。亡妻行状または亡妻伝は、明では四篇、清では十二篇を確認している。時代によって伝世の文献量に差があり、単純な比較は慎むべきだが、時代を追うごとに亡妻への哀悼文が増え、明清ではさほど珍しいものではなくなったことがわかった。

哀悼文の標題もそれを裏づける。「亡妻」という言葉は早くに定着していたが、一方、「亡妾」は宋を含めてそれ以前に用例が見当たらず、哀悼文では「〇氏墓誌銘」のように直接姓のみを書くことが通例だった。ところが元以降、標題に「亡妾〇氏」と書す作品が出てくる。「亡妾」は「亡妻」から派生した言葉であり、妻/妾の身分を画するメルクマールとして機能したが、別の側面から見ると、哀悼文の標題に冠される「亡妾」の二字は、士大夫が儒教規範を逸脱して、卑賤な身分の女性に対して散文の形で哀悼の念を吐露する際の免罪符の役割を果たしたともいえる。

亡妾哀悼文は亡妻哀悼文にやや遅れる形で明の中期以降に拡がっている。ただし、亡妻哀悼文の内容が亡妻と大きく異なるのは、正妻に対して従順なことが称賛される点である。亡妻への哀悼文が妻党を意識して、亡妻の出自や亡妻が姑や夫にどのように仕えたかという婦徳の顕彰に重きを置くのに対して、亡妾のための哀悼文で熱心に語られるのは、妾婢となった経緯や正妻やほかの妾婢との関係性、および彼女の薄幸の人生であった。亡妾哀悼文からは家の中で副次的な

立場にあった妾婢たちの寄り辺なさと、士大夫にとって彼女たちがもっとも身近で親密な女性であったことが窺える。

また、清には聘妻（婚約者）の死に際して哀悼文を書く者も現れた。清の楊名時の「元聘夫人趙氏墓碣」や顧寿楨「故聘室万氏哀誄」はその例である。また清の詞人舒夢蘭は聘妻郎玉娟のために伝記を書き、それは友人らの唱和詩とともに『花仙小志』として編集刊行された。聘妻は結納を交わしたとはいえ正式な婚儀を終えておらず、礼法上は婚家の婦とはみなされない。しかし、こうした聘妻に対してまで哀悼を示すのは、亡妻哀悼文が文学の重要なテーマとなっていたことを示すものである。清代には明代を引き継いで悼亡をテーマにした作品が多く作られるようになり、そのジャンルも悼亡詩、悼亡詞、亡妻墓誌銘、祭亡妻文、亡妻行状へと拡大してきた。清初の冒襄『影梅庵憶語』、乾隆年間になると、沈復『浮生六記』のように、家庭内の女性のことを憚りなく語る文学も登場するようになり、それは民国期の抒情小品文の流行の先河ともなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 野村鮎子	4. 巻 1017
2. 論文標題 明清における妾婢をめぐる士大夫の心性 亡妾哀悼文を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 1 - 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村鮎子	4. 巻 48
2. 論文標題 明清亡妻哀悼散文考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 叙説	6. 最初と最後の頁 64-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野村鮎子	4. 巻 47
2. 論文標題 舒夢蘭『花仙小志』にみる清代士大夫の聘妻悼亡の心性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 叙説	6. 最初と最後の頁 311-336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野村鮎子	4. 巻 19
2. 論文標題 前近代中国における女性同性愛/女性情誼のエクリチュール	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 奈良女子大学文学部研究教育年報	6. 最初と最後の頁 9 - 23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 野村鮎子
2. 発表標題 明清における亡妻哀悼散文の展開
3. 学会等名 第68回東北中国文学会（秋田大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野村鮎子
2. 発表標題 明清亡妻行状與士大夫心態
3. 学会等名 国際学術シンポジウム「新文化史視野下の明清、民國文學研究 反思與前行」（香港中文大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 野村鮎子監訳、和泉ひとみ他 4 名訳	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 552
3. 書名 『恋恋紅塵 中国の都市、欲望と生活』（台湾学術文化研究叢書）	

1. 著者名 卓清芬主編（野村鮎子著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 允晨文化實業股份有限公司	5. 総ページ数 1072
3. 書名 『空間與視野：明清文學與性別研究の新進境』所収80 107頁「中國士大夫如何書寫家中女性：試從性別觀點研究中國古典文學」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------